

## 「村研」と私

— 或る回想 —

住谷 一彦

村落社会研究会（以下「村研」と略す）との関係は、いまとなつてみると如何なる機縁にもとづいていたか、どうもはっきりした記憶が残っていない。おそらく大学時代からの友人である島崎稔君の勧誘によるのではなかったろうか。あるいは、福武さんが主唱者の一人であったから入る気になったのか。そのどちらでもあったかもしれない。ともかく最初から何ほどかの関わりを持っていたことは間違いないし、爾来いままに至るまで甚だ不熱心な会員ながら、止めないできているところを見ると、私にとって「村研」はそれなりに或る意味を持ち続けてきているといつてよいのだろう。学会の会費も高くなってきているし、私もやめたり、会費未納で自然退会になった学会も結構あるのである。では、「村研」は、私にとってどん

な意味をもっているのであろうか。

「村研」は「年報」をみても分るように、はじめからきわめて「学際的」であった。今日では専門分化の程度が進み、学会、研究会もそれに依りて増加してきて、学際的な学会は少なくなってきた。しかし、戦後初期はそうでなかった。土地制度史学会のような、一見きわめて高度に専門的な学会も、政治・法律その他の分野の人たちも参加して熱っぽい討論がおこなわれたことを、私は覚えてゐる。法社会学会や歴研もそうだった。その意味で、戦後初期の民主化という共通課題に総力をかたむけて熱っぽく立ち向つた「学際的」雰囲気、その後もずっと持ちつづけてゐる数少ない学会の一つが「村研」なのである。そうしたところに、私の何となく惹かれて、やめ難い理由の一つがありそうである。

「村研」は、私の理解しているかぎりでは、戦後の「農地改革」がどのような帰結を生むかを終始追及してきたように思われる。それは、あるときは「村落共同体」分析であったり、また別のときは「むら解体」であったり、さらには「村落自治」を問うことだった。りしたのではないだろうか。山田盛太郎先生の『日本資本主義分析』を持ち出すまでもなく、日本資本主義の基、底には日本農業Ⅱ農村の問題が蔽として在った。私も書いたことがあつたが、山田先生のとくに規定要因であつた地主的土地所有(das Untereigentum)が解体を遂げた場合、なお日本の近代化Ⅱ民主化を阻む要因は何かあるであろうか、また、在るとすればそれは何であるのか、それがいわば共通の問題意識であつたように思う。「共同体」の問題が浮

上してきたのも、そうした文脈裡においてであり、その理解をめぐつて経済学・歴史学・社会学の間で何ほどのギャップがあつて熱っぽい討論が繰返されたことも、今では懐かしい記憶である。ただ、その過程でこれまで家族論、同族論など日本農村社会学の多年にわたる学的蓄積が十分に生かされず、全体として経済的な分析ならびに社会運動論的な視角が優勢を占めるようになったかに見えるところに、若干の問題が残るのではなからうか。

もちろん、それには恐らく十分な理由があることだろう。近代化Ⅱ民主化の過程に主体的に関与しようとする視点が蔽存するかぎり、そうした傾向が状況の如何で強まることは無理のないところである。しかし、「村研」初期の頃を顧みると、有賀・喜多野・小池三長老をはじめ、かなり自由に多岐にわたる問題の発言があつたように記憶している。家の問題一つとりあげても、有賀・喜多野論争の示すような、すぐれて今日的意義を持つような局面が存在しているのである。戦前から戦後、今日に至るまで、農村社会学・文化人類学が蓄積してきた多くの研究業績が、「村研」の特徴である学際的な討論のなかに組みこめるようなかたちでの研究方向が、これからの「村研」には望まれてよいのではなからうか。